「京大教養部報」*No. 19*　昭和 *43 (1968)* 年 *10* 月 *25* 日。

中露教室だより

山口は植野教授と同じく言語学の出身である。専門は文体論で、大学院在学中から古代ロシア語諸年代記の文体論的研究をその課題としているが、共時と通時を統合しつつ古代ロシア語の表現手段の有する表現性を考察することに重点を置き、その一つの段階として文法的範疇を個別的に再検討しつつある。

またこれを支えるものとしての言語理論に関しては、特にチェコのプラーグを中心とする機能主義的言語学に興味を抱いているが、ヴント、ポテブニャなどの心理学派にも心を惹かれるものがある。しかし、学問の傾向としては、Neo-Humboldtian とでも称すべきものに属しているとひそかに考えている。

具体的な方法については伝統的な文献学的な方法を旨としている。

「京大教養部報」*No. 22*　昭和 *44 (1969)* 年 *10* 月 *30* 日。

外国語の学び方 — ロシア語

正直いってロシア語といっても他の語学の学習と本質的に異なるところはない。これは、言語というものが本来人間の精神活動の所産であるということに根ざしている。例として疑問文をとってみれば、ロシア語の疑問文なるものは特有の音調を有しており、さまざまのタイプに分たれる。これを「学問的」に分析すると複雑怪奇、とても実用に耐えるものではない。しかし、もし我々が「疑惑の念」をもって文を発すればどうであろうか。少々音調がでたらめでも、多くの場合疑問文と受けとってくれる。大切なのはこの「疑惑の念」であって、英語などで文末を上げたりするのも、これをより効果的に表現する約束にすぎぬと考えられる。

さてロシア語が英語と違うところは、主としてその強い情緒性にあると思われ

る。音調の変化の激しいのもそのあらわれであろうが、その他にも例えば語順がある。三語から成る文の語順の数は3！であるが、ロシア語は時と場合に応じてそのうちのどれかを用いる。どれを用いるかはもっぱら使用者の勘によるのであって丁寧な規則はない。悟るより外ないのである。このような曖昧さがロシア語にはいたるところにあるので、高校的規範英文法を学習して来た諸君には甚だ頼りなく感じられるらしい。教師である私の頼りなさもさることながら、このように空気をつかむような感じはロシア語のもつ本性にあることをも、理解して欲しいと思う。

次にこのような曖昧さ—或いは高い情緒性—を支えるためには語の形がしっかりしていることが必要となる。個々の語が文中でどのような働きをするかが明確に示されなければ、収拾のつかぬ混乱が生じるだろうからである。こういう訳でロシア語は語の変化がいくらか激しい。例えば名詞は12、形容詞は24、数詞は6というように変化する。このためロシア語では文法と講読という2本立ての授業は実際上できない。文法を毎週リレー式に行なって前期で済ませ、それから各自講読に入ることになっている。

最後にこれまでの見聞によれば、専門に進む場合にロシア語をよく使うところと、殆んど使わないところがあるとのことである。先輩に聞くなり、ガイダンスの時に確めるなりすることが必要かと思う。

とにかく6年かかった英語と同じレヴェルに2年間で達しようというのであるから、相当の覚悟とエネルギーが必要と思われる。効果的な教授法があればと試行錯誤を重ねているが、結局はシボルことに落着いている。しかし怨嗟の眼差を一身に浴びて授業を行なうのも気持のいいことではない。名案はないものであろうか。

山口　巖